

ヘモプラズマによる貧血を繰り返し末期に骨髄腫関連疾患を発症した FIV 陽性猫の 1 例

○大池三千男

1) おおいけ動物病院・帯広

【はじめに】猫のヘモプラズマ症（旧ヘモバルトネラ症）はマイコプラズマが赤血球に寄生し溶血性貧血を起こす。また、猫の骨髄腫関連疾患（Myeloma-related disorders, MRD）は、単クローン性γグロブリン（M 蛋白）増加症が認められる各種疾患や髄内および髄外形質細胞腫瘍を包括する疾患名として提唱されている呼称である。今回 FIV 陽性でヘモプラズマによる貧血を繰り返していた猫が 4 年弱の闘病末期に MRD を発症したので、その概要を報告する。

【症例】日本猫、11 歳齢、体重 3.9kg。過去に他院で FIV 陽性診断。当院にて半年前からインターフェロンや輸液等の対症療法を実施。歯石除去の為に血液検査を実施したところ、軽度貧血(PCV27%)を認めた。（第 1 病日）

【治療および経過】

- 1) 第 24 病日 PCV21%と減少し、末梢血でヘモプラズマ及び単球とマクロファージによる赤血球貪食を確認した。
- 2) ドキシサイクリン 6.25mg/kg BID 投与 4 日間で PCV34%まで増加したが、嘔吐と食欲不振、肝酵素の上昇で中止。
- 3) 第 174 病日 PCV25%と再発。Candidatus Mycoplasma haemoninutum と Candidatus Mycoplasma turicensis が陽性。
- 4) ドキシサイクリン 6.25mg/kg SID 12 日間投与、第 186 病日には PCV31%に回復したが、再び肝酵素が上昇した。
- 5) 貧血（PCV の低下）に伴い LDH（2 型アイソザイム）の上昇が認められ、溶血による上昇と診断した。
- 6) 再発期間は、146 日、258 日、90 日、67 日、119 日・・・112 日、65 日、21 日、34 日、7 日、3 日と短縮した。
- 7) 1,402 病日に TP9.5g/dl と上昇し、M 蛋白血症を認め、第 1,406 病日には脾腫を確認、MRD と診断した。
- 8) 赤血球、白血球及び血小板が減少し、プレドニゾロンとメルファラン投与で脾腫は改善したが、第 1425 病日死亡。

【考察】本症例は FIV 陽性で、ヘモプラズマ症の末期に MRD（髄外形質細胞腫）を発症した。溶血による LDH と 2 型アイソザイムの上昇は、治療の指標となった。脾臓は赤血球に寄生する病原体に対する主要な防御の場であり、赤血球からのヘモプラズマの除去（ピッティング）や主にマクロファージによる赤血球貪食が亢進する。末梢血液におけるマクロファージによる赤血球貪食は珍しい所見であった。一方、単クローン性γグロブリンの増加は、長期闘病の結果血管外溶血の場であった脾臓において腫瘍化した形質細胞によるヘモプラズマに対する抗体と考えられた。